

生け花の寿命について

1. はじめに

花を花ビンに生けたけれど、期待していたほど持たなかったという話は良く耳にします。その花が、なぜ持たなかったのかについてはいろいろな理由が考えられます。また、それについての対策もいくつか考えられるので、解説します。

2. 生け花の終了の状態

期待して買った花が、寿命を終える状態は、花により異なります。カーネーションやシュッコンカスミソウでは花弁が萎凋し、バラではベントネックと呼ばれる首曲りをおこします。キクでは葉の色が黄色くなってきたりします。また、その他ではスイートピーやデルフィニウムでの花弁の落下、ガーベラでの茎の腐敗等があります。

3. 生け花の寿命の原因と対策

カーネーションやシュッコンカスミソウの花弁の萎凋、スイートピーやデルフィニウムの花弁落下は、植物ホルモンで、老化を促進する働きを持つエチレンが主たる原因であるとわかっています。現在では、ほとんどの生産者は、エチレンの作用を阻害する薬剤であるSTS（硝酸銀とチオ硫酸ナトリウムの混合物）を切り花後に適当な濃度で処理してから出荷しています（前処理という）。そのため、花屋で買ったこれらの花は、十分に期待どおりの寿命を保ちます。

バラのベントネックは、導管閉塞（導管が詰まること）により水を吸い上げなくなるためにおこるといわれています。導管閉塞の主たる原因は現在のところは切り口周辺にバクテリア（細菌）が増殖して導管をふさいでしまうためであるという説が一般的になっています。そのため、バクテリアをコロイド状に吸着して無力化する硫酸アルミニウムや、バクテリアの増殖を抑える殺菌力の高い薬剤（硝酸銀他）等を主成分とする前処理用の製品が販売されています。しかし、これらの薬剤はコストの割に前述のSTSほどの効果がないため、あまり普及していないのが現状で

す。このような現状で、花瓶に生けたバラをより長く観賞するための方法としては、花瓶の水を定期的きれいなものに交換して、バクテリアの発生を抑えたり、切り口を切り戻して水揚げを良くする等の方法が考えられ、実際行われていることと思います。しかし、もっとも効果のあるのは、花瓶の水に糖分、殺菌剤、界面活性剤、植物ホルモンなどを主成分とする薬剤を添加する方法です（後処理という）。表1に示すように、切り戻しや水交換などの物理的な処理に比べて大きな効果が期待できます。ほとんどの花店で後処理剤として販売しているので試してみる価値は高いと思います。

キクでの葉の黄化は、輸送中のむれ等により、みずみずしさが低下して、その後の生け花中に起こります。対策としては、殺菌剤の第4アンモニウム化合物の前処理がオランダで行われていますが、日本では、キクは花持ちが良いというイメージから前処理はほとんど行われていません。対黄化というだけなら植物ホルモン剤（ベルジルアデニン、ジベレリン）の使用の効果はありますが、花に障害が出るため実用化されていません。

ガーベラの茎の腐敗は、生け水中のバクテリアが主原因であるため、対策としては、バラと同様に後処理剤の利用がもっとも効果的です。

4. おわりに

以上述べてきたように花の種類で寿命の延長方法は多種ありますが、花の寿命に関する研究は（生理生態、遺伝情報など）歴史が浅いため、今後の更なる研究により、花の寿命が画期的に延長されることが期待されています。（園芸部 上山茂文）

表1 生け花後の処理がバラベントネックに及ぼす影響

生け花後の処理	ベントネック発生日
無 処 理	6.8日
生 け 水 交 換	7.2
切 り 戻 し	6.6
生け水交換+切り戻し	8.4
後 処 理 剤	12.6

注) 試供品種 'ソプレス' 生け水及び切り戻しは2日に1回、切り戻しは1cm